

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03428

研究課題名(和文) Mirativityにおける「焦点」と「評価」の役割：日英語からのアプローチ

研究課題名(英文) Defining Mirativity with the Notions of Focus and Evaluation: With Special Reference to Japanese and English

研究代表者

島田 雅晴 (Shimada, Masaharu)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：30254890

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,900,000円

研究成果の概要(和文)：Mirativity(意外性)という概念が近年言語学において注目されている。一般に、Mirativityとは話者の予想していなかった新情報やそれに対する驚きを表す文法上の範疇とされている。本課題は、これまでMirativityの研究がほとんどなされてこなかった日本語と英語をとりあげ、両言語でMirativityを示す文法要素はなんであるのかを問うものである。特に成果として、日本語の文末詞「の」、「こと」がmirativeに関わる文法要素であること、また、日本語の形容詞語幹(屈折語尾を除く部分)がmirativeを表す要素として機能することがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでmirativityの研究がなされてこなかった日本語や英語を対象にしてこの文法概念を取り上げたこと自体、学術的に大きな意義がある。しかも、日本語についてmirativityを表す文法要素の候補を3種類特定できたことは大きな貢献であるといえる。さらに、日本語の方言研究を進展させたところにも本研究の成果が見られ、本研究が理論言語学の枠にとどまらず、文化や社会に広く関わるものであることがわかる。特に、方言と標準語の文末詞の使い方の違いを科学的に解明する手法を示しており、文化・社会の産物と捉えられがちな方言に科学的知見を与えている。

研究成果の概要(英文)：The notion of mirativity has been paid attention to as one of the new topics in modern linguistics. It is generally assumed in the literature that mirativity is a grammatical category whose primary meaning is speaker's unprepared mind, unexpected new information, and surprise. In this study, we attempted to search for mirative markers in Japanese and English, since they have not been seriously studied yet. Then we identified the sentence-final particles "no" and "koto" as mirative markers in Japanese, and also found that Japanese adjectival stems can function as miratives in some environments.

研究分野：理論言語学

キーワード：生成文法 カートグラフィー 方言研究 文末詞 形容詞 形容動詞 評価の形態論

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 話し手がある情報を「意外だ」と驚きをもって評価する文に関して、従来はその意味を Evidentiality (証拠性) などのような既存の文法概念に還元して説明するのが一般的であった。しかし、DeLancey (1997) が「話者の驚きの感情」を表す Mirative という文法範疇を Evidentiality (証拠性) とは独立に想定して以来、Mirative という文法範疇が真に存在するのか、しないのか、という論点が生まれた。

Mirative の独立性を証明する議論は、Evidentiality には還元できない意外性、驚きの感情を表す形態素が存在する、という論法で、様々な多総合的言語や膠着言語のデータをもとになされていた。例えば、次のトルコ語の例文内に生起している形態素 *-mus* は Mirative marker と呼ばれ、Mirative という文法範疇の具現形とされた。

- (i) *kız-iniz çok iyi piyano çal-iyor-mus*
daughter-your very good piano play-PRES-MIR(ative)
'Your daughter plays the piano very well!' (DeLancey 1997: 38)

このように、研究開始当初の学術的背景として、Mirative という文法範疇を独立に立てるのか立っていないのか、Mirative という文法範疇の形態具現形式はあるのかないのか、という論争があったことがあげられる。2012年発刊の *Linguistic Typology* 誌 16 巻でこのテーマの特集が組まれているのは象徴的である。

(2) 日本国内においては、Mirativity という概念に焦点をあてた研究はそれほど多くなく、とりわけ理論研究においてはまれであった。そもそもこの概念自体あまり知られていないように思われる。Mirative という文法範疇が独立して存在することをそれ専用の形態素が存在することで証明しようとする DeLancey の観点からすれば、データとする言語が類型論的に偏るのはある程度やむを得ないともいえる。不変化詞「の」のように単一の形態素が多く機能を持ちうる日本語や屈折形態素が平板化している英語が調査の対象に入っていないのはある意味当然のことである。日本語や英語の研究が盛んな日本の言語研究で Mirativity が注目されてこなかった要因の一つとも考えられる。

(3) Mirativity という新たなテーマに着目して研究領域を開拓し、多くの興味深い事実と知見を提示してきたこれまでの先行研究の成果とその重要性はいくら強調してもしすぎることはない。一方で、データとする言語が類型論的に偏っていたことから、Mirativity の真の姿が見逃されてきたのではないかと、いう可能性も否定できない。この意味において、形式と意味が one-to-one ではなく one-to-many あるいは many-to-many の関係になる言語、つまり、これまでの研究で対象となった言語とは類型論的に異なる言語を取り上げ、しかも、その中で形態論的タイプの異なる日本語と英語に着目して両者を比較しながら Mirativity を研究するとすれば、その意義は計り知れないと考えられる。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、今までの Mirativity 研究にはなかった観点から、Mirativity とは何なのかを問うところにある。先行研究のほとんどは類型論の観点からなされたものといつてよい。それに対して、本研究は生成文法理論の視点から Mirativity の「話者の驚きの感情」という意味とその形式を問いなすものである。そして、Mirativity という文法概念・文法範疇は心的文法に存在するのかしないのか、存在するとすれば、どのような構造をもっているのかについて論じ、特に、カートグラフィー理論を援用して分析する。

(2) 具体的には、次にあげた 3 つの Research questions (R) について調査・研究を行うことを目的とする。

- R1: 日本語および英語の Mirativity 表現を特定し、Mirativity 表現を定義する。
R2: 日本語および英語の Mirative marker に相当する形態素もしくは構文を特定する。
R3: Focus と Evaluative という概念で Mirativity の解釈が可能になるしくみを解明する。

Mirativity は、話者の驚きを表す概念、と一般に言われてきたが、「驚き」といってもその意味する所は様々に考えられる。R1 では、日英語をデータにして、ここでいう「驚き」の意味を明確にし、Mirativity の解釈を定義する。R2 では、日本語や英語ではどのような形態素・構文が Mirativity 表現にあたるのかを調べ、記述する。R3 では、Mirativity 解釈の出所を生成統語論、特に、カートグラフィー理論の観点から説明する。その際、評価の形態論の知見も活用する。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、Mirativity 研究を他の既存の研究分野、談話と統語のインターフェイスの研究および評価の形態論 (evaluative morphology) の研究と有機的に融合することで新たな知見を得て、研究目的のリサーチクエスチョンにこたえるという手法をとる。したがって、研究代表

者、研究分担者がそれぞれ分担してこの3分野の基礎文献を精査し、情報共有することが必須である。それと同時にそこで得られた情報をもとにして、データの発掘やそれに基づいた作例で研究を進める。その結果、日本語および英語の mirative 形態素あるいは mirativity にかかわる文法操作と思われるものを特定し、分析案の作成とその妥当性の検証を行う。

談話と統語のインターフェイスの研究については、カートグラフィー理論の枠組み、中でも Cruschina (2012) に多く依存し、その分析を発展させることとする。また、評価の形態論については、形態論をできるだけ多くの統語概念で分析するという分散形態論につながる考え方と、形式と意味はそれぞれ独立してその組み合わせは1対1ではないとする Beard (1995) の分離仮説を仮定することを基本とする。

(2) 本研究の研究方法がもつ特徴の1つは、日本語研究において方言を積極的に活用するところである。東京方言の言語事実では隠れたままであっても、方言の言語事実により普遍文法の性質が明らかになることはよくあることである。東京方言では単一の形態素が使われるところを、他の方言では複数の形態素で区別されることが多く、方言に mirative 形態素の証拠を求めるといった手法は理にかなっていないと思われる。本研究では研究代表者の母語である東京方言、研究分担者のうちの1名の母語である福岡方言を比較するところから始め、可能であれば、もう1名の研究分担者の母語である弘前方言も考察の対象とする。

(3) 研究代表者が指導している大学院生の中には英語の意外性表現についてカートグラフィーの枠組みで学位論文を執筆している者や形態論、焦点をテーマにして研究を行っている者がいる。彼らとは同じ研究グループに属し、研究会、授業等で日常的に情報交換をする機会がある。このことは本研究を進めるうえでの重要な資源となる。

4. 研究成果

(1) 日本語に関する mirative 表現に関する大きな研究成果は、Cruschina (2012) のカートグラフィー分析を援用した研究代表者と研究分担者の長野の共著論文、Shimada and Nagano (2017) である。以下に主な論点をまとめる。

① 日本語の mirative 表現として、「の」mirative、「こと」mirative、語彙的 mirative の3種類を特定した。(i) から (iii) がそれぞれの例であり、mirative 要素を太文字で示してある。

- (i) 朝**っ**ばらからめ**っ**ちやうる**さい**の！
- (ii) 朝**っ**ばらからえら**く**うる**さい**こと！
- (iii) 朝**っ**ばらからめ**っ**ちや**うる**さ！

これらの文はすべて「朝からうるさい」ということについて、話者の予期しない驚きあるいは期待していないことに対する何らかの感情を表しているといえる。(i) では文末詞の「の」、(ii) では文末詞の「こと」が生起しており、それらを mirative 形態素とした。また、(iii) は形容詞語幹そのものを、いわば、mirative 形態素と見なした。これらの事例は日本語に mirative 形態素があることを意味し、日本語のデータからも mirative という文法概念が独立に存在するという考え方が支持されることになる。

② Cruschina (2012) は、主にヨーロッパ言語を対象にして焦点にかかわる文法現象をカートグラフィー理論で説明した研究であるが、その分析が上記 (i) から (iii) のような日本語の mirative 表現を説明することに応用できることを示した。このことは、心的文法内の一般性の高い仕組みが mirative 表現の生成と解釈にかかわっていることを示唆している点で、理論的にも記述的にも大変意義深い。

③ 具体的な分析を簡潔に提示する。カートグラフィー研究の特徴は、命題の意味だけでなく談話の意味も統語論で処理されるとする点にあり、特に、CP 領域内に主題素性 [top] と焦点素性 [foc] という談話関連素性を想定する。そして、それぞれ、機能範疇の Top(ic) と Foc(us) における指定部・主要部の一致によって照合すると考える。さらに、Cruschina (2012) は Foc を対象焦点を認可する CFoc と情報焦点を認可する IFoc に分け、さらに IFoc の位置を CP 内と VP 内の2か所に想定する。そして、シチリア方言やサルディーニャ方言の mirative 表現のふるまいから、mirative 表現は CP 内の IFoc 指定辞に移動して具現するという結論に至っている。

Cruschina の分析を援用することで日本語の Mirative 表現も CP 内の IFoc で認可されるという分析が可能となる。「の」mirative と「こと」mirative の「の」と「こと」は IFoc の素性が形態具現したものといえる。また、語彙的 mirative は、ロマンス語の mirative 表現のように IFoc 指定辞への移動で認可されると考えられる。

④ mirative 形態素の「の」と「こと」は機能範疇 IFoc の具現形であるが、語彙的 mirative は名詞的な半語彙範疇を主要部に持つ構造になっているといえる。

⑤ 日本語の「の」と「こと」は代名詞あるいは形式名詞としての用法もあるが、補文標識としての用法もある。カートグラフィー理論に基づけば、IFoc は従来の補文標識が生起する位置よりさらに構造的に高い位置に生起する機能範疇で、さらに機能的働きが高まった要素といえる。「の」、「こと」の歴史発達を調べると名詞用法、補文標識用法、IFoc 用法という順に時代を追って発達していることがわかる。したがって、「の」と「こと」の一連の発達を一種の文法化とみることも可能である。

(2) mirative 表現が持つとされる「話者の予期しないことへの驚き」という意味を「話者の事態への評価」ととらえる方向性を提案した。これは、Cruschina の分析に評価の形態論の考え方をとりこむことを意味し、具体的には、IFoc の node の上に評価にかかわる機能範疇があるとするのである。Cinque (2015) は、実際、語構造内に評価の意味をもたらす機能範疇を仮定しており、語レベルと統語レベルで仕組みに差がないとする分散形態論の考え方に基づけば、統語レベルでも同様に評価にかかわる機能範疇があってもよいことになる。ここで、便宜的にそのような機能範疇を Evaluative としておくと、Evaluative と IFoc という 2 つの主要部を持つ機能的意味の合成により mirative という読みが生まれると考えられる。この意味で、正確には Mirative という文法範疇はないことになるが、mirativity の読みを文法範疇に還元するという点では DeLancey の考え方に沿うものである。

(3) 英語の mirative 表現については、大学院生たちを含めた研究グループの研究により一部の倒置現象、例えば、場所句倒置、述語倒置などがそれにあたるという見込みが得られた。

(4) 東京方言と福岡方言の比較・対照研究において、mirativity にとどまらず、当初の予定を超えた成果が得られた。分析対象となったいくつかの現象をとりあげて、以下に簡潔に述べる。

① まず、福岡方言の文末詞「たい」と「ばい」の機能と用法の研究があげられる。母語話者にはこの 2 つの文末詞ははっきりと対をなすという直感があり、伝統的な国語学でも方言学でも何度も取り上げられてきたものである。しかし、分類、分析とも混乱をきたし、かなり難しい研究対象とされてきた。Cruschina の CFoc と IFoc を仮定する理論の目からあらためて「たい」と「ばい」の用法を見なおすと、「たい」は対象焦点のマーカーで CFoc により生起するもの、一方、「ばい」は情報焦点のマーカーで IFoc により生起するもの、というクリアで妥当性の高い分析が提示できた。「たい」と「ばい」を焦点マーカーとする初の分析であり、大きな成果である。

② 福岡方言の動詞付加アスペクト表現をいくつかとりあげ、一部は東京方言との比較・対照を行った。まず、福岡方言の進行を表す不変化詞「よう」と完了を表す不変化詞「とう」の比較研究を行い、「とう」が話者により進行を表す場合があることを詳細に記述した。福岡方言と東京方言の比較も有意義であった。「よう」は存在を表す状態動詞の「ある」とは共起しないが、それは東京方言で進行を表す表現、「～ている」でも同じである。しかし、物事が開催されている、という意味の「ある」との共起については、「よう」のみ可能で、例えば、「会議のありよう（会議がいま行われている」、の意）」が容認される。また、「～てある」に進行の解釈が可能となるところも東京方言にはない福岡方言の特徴であることがわかった。このような現象は、意味解釈をもたらす抽象的な形態統語構造は言語間で変わりはないが、それを具現した表面の表示が異なりうる、という生成言語学のアプローチでかなりの部分を説明できることが示された。

③ 福岡方言の可能表現「～きらん」と「～ださん」について、理論言語学的な分析ができた。

(5) 福岡方言の研究では、福岡市、北九州市、大牟田市のシルバー人材センターの協力のもと、また、福岡方言調査を補強するために行った熊本方言調査では、八代市のシルバー人材センターの協力のもと、現地の実地調査を実施した。結果として、本研究が一般の人への学術研究に参加する窓口として機能したのである。社会一般に方言というと、方言間の単語の意味の違い、当該方言の珍しい単語など、語彙範疇の特異性が取り上げられるが、機能範疇に着目する本研究を通して、シルバー人材センターの会員に言語について全く新しい見方があることを伝えることができた。また、研究代表者、研究分担者とも貴重な方言の言語データを収集・記録することができたが、このことは言語の理論研究のみならず、方言を残すという、文化的な取り組みにもわずかながら関与できたことを意味する。

参考文献：DeLancey, Scot (1997) “Mirativity: The grammatical marking of unexpected information,” *Linguistic Typology* 1, 33-52. /Cruschina, Silvio (2011) *Discourse-related features and functional projections*. OUP.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Masaharu Shimada and Akiko Nagano	4. 巻 23
2. 論文標題 Relational Adjectives Used Predicatively (But Not Qualitatively): A Comparative-Structural Approach	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Lexique	6. 最初と最後の頁 62-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 三上傑	4. 巻 95
2. 論文標題 英語の結果構文が示す「非能格性」：非能格動詞結果構文が許容する二つの解釈と構造的曖昧性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英文学研究	6. 最初と最後の頁 53-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Masaharu Shimada	4. 巻 なし
2. 論文標題 Apparent omission of inflectional endings in Japanese adjectives	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The studies on syntactic cartography: Proceedings of the International Workshop on Syntactic Cartography 2015	6. 最初と最後の頁 365-379
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Masaharu Shimada and Akiko Nagano	4. 巻 7
2. 論文標題 Miratives in Japanese: The Rise of Mirative Markers via Grammaticalization	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Historical Linguistics	6. 最初と最後の頁 213-244
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/jhl.7.1-2.09shi	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Suguru Mikami	4. 巻 36
2. 論文標題 Two Types of Focus-Prominent Languages and Diachronic Change in Japanese Syntax	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Suguru Mikami	4. 巻 35
2. 論文標題 The Passivization of the Gesture Expression Construction and the Formulation of Subjects in Terms of Aboutness	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 259-265
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Nagano and Masaharu Shimada	4. 巻 なし
2. 論文標題 How Poor Japanese Is in Adjectivizing Derivational Affixes and Why	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Word-Formation across Languages	6. 最初と最後の頁 219-240
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島田雅晴	4. 巻 なし
2. 論文標題 日本語に左側主要部の複合語は存在するのか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 言語についてのX章：言語を考える、言語を教える、言語で考える	6. 最初と最後の頁 40-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Nagano	4. 巻 35
2. 論文標題 Morphological Realization of Focus Head in Hakata Japanese.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長野明子	4. 巻 なし
2. 論文標題 博多方言の疑問文末詞の変異と変化の観察	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論	6. 最初と最後の頁 324-344
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長野明子	4. 巻 なし
2. 論文標題 平叙文末詞と疑問文末詞の対応関係について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 言語についてのX章：言語を考える、言語を教える、言語で考える	6. 最初と最後の頁 88-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 0件/うち国際学会 10件)

1. 発表者名 Masaharu Shimada and Akiko Nagano
2. 発表標題 A bound-free distinction in a cross-linguistic variation: A dialectal study on functional verbs
3. 学会等名 The annual meeting of the Linguistic Association of Great Britain(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Akiko Nagano and Masaharu Shimada
2. 発表標題 Ambiguities of existential-based V+V sequences in Standard and Fukuoka Japanese
3. 学会等名 The 19th International Conference on Turkish Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三上傑
2. 発表標題 語用論的要素の統語操作との関わり方とその言語間変異
3. 学会等名 日本英文学会東北支部第73回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masaharu Shimada and Akiko Nagano
2. 発表標題 Three functional positions for aspects: Evidence from Kyushu Japanese
3. 学会等名 Workshop on Pseudo-Coordination and Multiple Agreement Constructions (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Masaharu Shimada and Akiko Nagano
2. 発表標題 A relational nominal structure in nominal predicates
3. 学会等名 Premier Symposium International de Morphologie (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Masaharu Shimada and Akiko Nagano
2. 発表標題 Selection of sentence-final particles in answers
3. 学会等名 Why Indeed? Questions at the Interface of Theoretical and Computational Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Suguru Mikami
2. 発表標題 The Passivization of the Gesture Expression Construction and the Formulation of Subjects in Terms of Aboutness
3. 学会等名 ELSJ 10th International Spring Forum 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 三上傑
2. 発表標題 焦点卓越言語としての日本語と主語尊敬語化
3. 学会等名 日本語文法学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 島田雅晴
2. 発表標題 あえて生成文法の観点から
3. 学会等名 三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Akiko Nagano and Masaharu Shimada
2. 発表標題 A recipe website as a context for code-switching: A web-based survey on recipe English by Japanese speakers
3. 学会等名 The 2nd international conference on Food and Culture in Translation (FaCT) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Masaharu Shimada and Akiko Nagano
2. 発表標題 Mirativity and Focus in DP
3. 学会等名 Olomouc Linguistic Colloquium 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Masaharu Shimada and Akiko Nagano
2. 発表標題 Mirative interpretations with verbal past-tense forms in Japanese
3. 学会等名 Workshop on Aspect and Argument Structure of Adjectives and Participles (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Masaharu Shimada and Akiko Nagano
2. 発表標題 Attributive modification in depictives
3. 学会等名 SLE 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 長野明子
2. 発表標題 言語使用の三層モデルと形態論
3. 学会等名 三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 三上傑
2. 発表標題 焦点卓越言語としての日本語における定形節のフェイズ性
3. 学会等名 日本語統語論研究の広がり 理論と記述の相互関係
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子（編）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 271
3. 書名 三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ	

1. 著者名 Yuichi Ono and Masaharu Shimada (eds.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba	5. 総ページ数 94
3. 書名 Data Science in Collaboration 1	

1. 著者名 小川芳樹・長野明子・菊地朗（編）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 453
3. 書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論	

1. 著者名 河正一・島田雅晴・金井勇人・仁科弘之（編）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科	5. 総ページ数 588
3. 書名 言語についてのX章：言語を考える、言語を教える、言語で考える	

1. 著者名 竹沢幸一・本間伸輔・田川拓海・石田尊・松岡幹就・島田雅晴（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 304
3. 書名 日本語統語論研究の広がり 記述と理論の往還	

1. 著者名 西原哲雄・都田青子・中村浩一郎・米倉よう子・田中真一（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 304
3. 書名 言語におけるインターフェイス	

1. 著者名 Eva A. Csato, Lars Johanson and Birsel Karakoc	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Otto Harrassowitz	5. 総ページ数 342
3. 書名 Ambiguous Verb Sequences in Transeurasian Languages and Beyond	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長野 明子 (Nagano Akiko) (90407883)	東北大学・情報科学研究科・准教授 (11301)	
研究分担者	三上 傑 (Mikami Suguru) (60706795)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師 (11301)	